受賞の弁　ドイツ語論文部門

小黒　康正

九州大学文学部の教授会には奇妙な慣例がある。サバティカル明けの教員は教授会の冒頭で研究休暇中の成果を口頭で報告しなければならない。私の場合，2016年4月の教授会冒頭で，1年間のウィーン滞在に関して一同に謝罪をした。「誠に申し訳ございません。サバティカル申請時の研究をほとんど進めることができませんでした。このような体たらくを怪しからんと思われるようでしたら，皆さん，なにとぞご叱責ください，『ウィーンに戻ってやり直してこい』と。」

2012年に二冊目の単著『水の女』（九州大学出版会）を上梓し，2014年に拙訳のヘルタ・ミュラー『心獣』（三修社）を世に問うた後，私の関心はルードルフ・カスナーに向けられていた。独自の「観相学」を展開したオーストリアの思想家はドイツ語圏でも忘れられて久しいが，私が読んだ『モティーヴェ』（1906）も『観相学の基礎』（1922）も『変身』（1925）も実に興味深い。それで私は2015年4月からの1年間をウィーンにてカスナー研究に集中することを決めていた。しかし，私の研鑽の成果は，誠にお恥ずかしい話だが，とあるホイリゲの裏に「ルードルフ・カスナー小路」をたまたま見つけたことにとどまったのだ。

振り返ると，2014年の秋，日本独文学会の藤井明彦理事から思いもかけない打診があった。『ドイツ文学』の国際誌でトーマス・マン特集を組みたいので，特集の編集責任者を引き受けていただけないかと。実は，当方，最初の単著『黙示録を夢みるとき　トーマス・マンとアレゴリー』（鳥影社）を2001年に出した後はマン研究から離れていた。それだけに，すぐに快諾できなかったが，最終的に藤井氏の熱意に屈し，私は大きな弧を描くようにしてマンに戻ったのである。

こうしてカスナー研究はなおざりになった。もっとも，無事にウィーンに到着したことを知人のドイツ人教授二人に伝えたところ，それぞれからご提案があって，2015年11月にミュンスター大学とビーレフェルト大学で講演を行うことになり，さらに偶然が偶然に重なり，12月にブラウンシュヴァイク工科大学で，翌年1月にアイヒシュテット大学で，2月にフランクフルト大学で講演を行うことになったのである。何れの大学でもマン特集に寄稿する拙論で臨んだが，まさにこの原稿が今回の受賞論文となった。思えば，講演後の質疑応答は，毎回，活況を呈しただけに，受賞の朗報を聞いたとき，拙論に関心を持って議論に臨んでくださった方々の「顔」を思い出した。そして，私のマン研究の基礎を作ってくださった池田紘一先生と私に大きな弧を描く機会を与えてくださった藤井氏の「顔」も心に浮かんだとき，ウィーンでするはずだった研究のことを序でに思い出した。

2018年3月，九州大学文学部教授会で私の受賞のことが報告されたとき，皆の前で学部長から身に余るお言葉をいただいた，「小黒教授のサバティカルはまさに研究休暇のお手本です」と。もっとも，ここだけの話しだが，私としては賞賛よりも，叱責されたかったのだ，「ウィーンに戻ってやり直してこい」と。

（九州大学教授）